九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

授業研究における抽出児に関する基礎的考察 : 対象児との比較を中心に

田上, 哲
九州大学大学院人間環境学研究院国際教育環境学講座 : 教育方法学

https://doi.org/10.15017/15599

出版情報：大学院教育学研究紀要. 11, pp.111-123, 2009-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学研究紀要，2008，第11号（通巻第54号），111-123
Res. Bull. Education, Kyushu U., Vol.11, 111-123

授業研究における抽出児に関する基礎的考察

―対象児との比較を中心に―

田　上　　哲

問題の所在

授業は，教師が教材を介して子どもを指導する集団過程としての営みである。その集団過程としての授業を研究する際，抽出児（選定された一人ないし数名の子ども）[1] に焦点をあてることがしばしば行われてきた。筆者は，この抽出児は日本の授業研究における重要な特徴の一つであると考えている。

現在，日本の授業研究は海外に紹介され，高い評価を受けている。とくにアメリカ合衆国や香港などでは，積極的に授業研究を展開しようとしている[2]。しかし，このように諸外国が注目し評価している授業研究は，日本の各学校で実施されてきた校内研修としての授業研究である[3]。すなわち，研究授業に向けた事前検討，教師集団で見合う研究授業，研究授業後に参観者が参加して行う事後検討会，そういった様式としての校内研修型授業研究に，諸外国は日本の教師の優秀さ，子ども達の学力の高さの要因を見ようとしているといえよう。

しかし，日本の授業研究は，学校で実施されるそのような校内研修なものにとどまるものではない。極めて多元的・重層的に展開されてきた[4]。日本教育方法学会は，現在，『日本の授業研究』の刊行に向け作業をすすめている。これは邦文書籍としてだけでなく，英文書籍（“Lesson Study in Japan”）としての刊行も予定されており，日本における授業研究の歴史や多様な展開を海外に紹介することを一つの目的としている。

さて筆者は，日本の授業研究について，それが本格的に授業研究として展開し始める黎明期から，研究の一つの底流に，一貫して学習者たる一人ひとりの子どもへの注視があったと考えている。そして，そのことを如実に体現しているのが，本研究で考察する抽出児である。

抽出児は，教育現場における実践者による実践的研究においても，また教育研究者による学術的研究においても，しばしば用いられてきたものである。例えば，筆者自身，抽出児に焦点をあて長期に亘る授業における子どもの発言や子ども相互の発言関係の様相をとらえる試み[5] や授業記録処理を介した抽出児選定に基づく授業研究[6] に取り組んできた。

しかし，筆者自身の研究も含め，これまでの授業研究においては，なぜ抽出児を用いるのかということについては，その理由が十分に明確な形で示されてこなかったのではなかろうか[7]。まして，抽出児を用いたことにより授業研究に一体何が生じるか，生じているのかについてはほとんど注意

が払われてこなかった。すなわち，抽出児は授業研究の日常の中に埋め込まれ，経験的に有効なものと考えられながらも，方法論的な基礎づけが十全には行われてこなかったと言えるのではなかろうか。

授業研究における抽出児の方法論的な基礎づけを行うためには，抽出児がいかなる原理のもとで，授業研究においていかに機能しているかを明らかにする必要がある。

１．本研究の目的と方法

本研究の目的は，授業研究における抽出児の原理，すなわち授業研究において選定された一人ないし数名の子どもに焦点をあてることの原理を考察することである。

そのための方法として，対象児[8] と比較検討するという方法をとる。対象児は主に特別支援教育（従来の障害児教育）や療育の分野において用いられるものであり，欧米においては“Target Child”と呼ばれ，抽出児と同じように個としての子どもに焦点をあてるものである。この対象児を抽出児の比較検討の対象に選んだのは次の理由による。

すなわち，対象児は，抽出児と同じく教育の場において，個としての子どもに焦点をあてるものであるが，その選定方法等，対象児の取り扱いについてはかなりの程度一般化が図られており，その原理が比較的明瞭でとらえやすいと考えられるからである。まず，この対象児の特徴を検討し，そこから抽出児と比較するための視点を構成する。そしてその視点に基づき，抽出児について対象児との対照比較を行い，授業研究において抽出児がどのような原理を有しているのかを考察する。

２．授業研究における抽出児

⑴授業研究における抽出児のとらえ方

抽出児について，「抽出」という言葉のニュアンスも手伝ってか，次のような記述があるように一般的にはあまりよいイメージはもたれていないかもしれない。「先生が教材研究をする時，クラスから抽出した子どものことを指す。たとえば算数の授業で，分数につまずいている子どもの中から一人を選び，集中的に観察し，授業の進め方を研究する。子どもは自分が抽出されたことをもちろん知らない。」[9]

しかし，それにも関わらず，抽出児は授業研究においてしばしば活用されている。授業研究において活用されている抽出児はどのようにとらえられているか，例えば，次の２つの概説をみてみる。

まず，近藤は「抽出児は，授業目標や授業仮説などに照応して選ばれる。一般には，研究授業で一定の観点から事前に数人の抽出児を選び，授業における抽出児の発言や活動を詳細に観察し記録する」と述べ，抽出児を選ぶ観点として次の３点をあげている[10]。

①授業目標との関係で，特徴的な傾向をもち，同類型の子どもの代表となる数名を選ぶ

②研究テーマがあらかじめ設定され，仮説を実証しようとするために，反応が容易に把握できる

子どもを選ぶ

③子どもの日常の姿から数人を選ぶ→普段から気にかかる子，情緒的に不安定になっている子，対人関係に悩んでいる子，教師にとって不都合さを持っている子など

また，梅沢は，抽出児に関して，次のように述べている。

「カリキュラムや教材を開発し，それを児童・生徒に教育実践という形で試行し評価・分析することがある。このようなとき，学年や学級全体の約100名あるいは，40名を対象にすることは当然であるが，観察記録し，分析するデータ量を軽減し，確かな分析を行うに必要な数まで小さくするために指標となる学習者（抽出児という。）を選び行うことがある。数学でいう標本調査（サンプル調査）と同じ考え方である。教育において抽出児は，『○○さんを何とかしたい』という指導上の願い（ピグマリオン効果?）を込めて，選ぶことが多い」とした上で，抽出児の選択の観点として①観察しやすいこと，②比較対照できる子，③抽出児の人数をあげている[11]。

以上，この２つの抽出児に関する説明を見ても，それぞれとらえ方の内実は若干異なっている。近藤は「授業目標や授業仮説に照応して」「一定の観点から」選定することを強調し，梅沢は「標本調査（サンプル調査）」と同じものととらえている。また，抽出児の選定（選択）の観点もそれぞれとらえ方が異なっている。このようにそれぞれのとらえ方や強調している点が少なからず異なっているのは，授業研究における抽出児の方法論的な基礎づけが十分にはなされていない部分がまだ多いことの証左でもある。

⑵授業分析の創始と抽出児

抽出児の考え方は，もともとは重松鷹泰によって創始された授業分析の発展展開の中から生まれてきたものである。授業を観察する際，子どもの側の動きをみることに関して，重松は「くわしく観察すべき子ども数名をあらかじめ選定しておき，その子どもたちを分担して観察することはきわめてのぞましいことである」と述べ，選定された４名の子どもが詳しく観察された「奈良市帝塚山小学校において，1960年９月16日（金）に実施された，2年月組（男子11名女子13名）旭静代教諭の理科授業の記録」を分析事例としてあげている[12]。

また，重松の指導により授業研究を進めてきた富山市堀川小学校では，授業実践の総合記録の作成において，「抽出した児童の動き」の欄を設けている[13]。重松は後に「《抽出児》というのは，授業観察のさいに，とくに注意してその言動やその背後にある思考や認識の発展を観察し記録する対象児童のことである」[14] と述べている。

このように抽出児は，まず授業分析に向けた授業観察の中に位置づけられた。ここで確認されるのは，子どもたち一人ひとり全員を見ることができないからという消極的理由というよりはむしろ，「とくに注意してその言動やその背後にある思考や認識の発展を観察し記録する（傍点は筆者による）」ために抽出児が選定されていることである。すなわち，授業分析の目的である，子どもの思考の動きの追究するために，分析者が意図的に選定した抽出児を観察記録することが有効だと考えられているのである。

⑶実践研究としての授業研究における抽出児

授業分析においては，授業の観察，授業後の検討において抽出児が活用される。それに対して，授業の計画ならびに実施の段階，すなわち授業づくりための実践的研究としての授業研究においても抽出児は活用されてきた。

このことに関して，上田薫は「授業において何人かの抽出児をおくことは動的場の理にかなっている。教師はたえずその子を深く追うことによって，他の子どもたちにも迫ることができるのである。抽出児は教師が集団に迫る媒介点だといってもよいであろう」[15] とし，「抽出された生徒は問題児ではない。あくまでも教師がある意図をもって選んだ子である。個性能力を異にした大勢の生徒を相手に一斉授業をやるためには，あらかじめよく把握してある数名の抽出生を手がかりにするのがきわめて効果的なのである」[16] と述べ，抽出児を手がかりに，教材研究，授業構成等を考えていくことによって子どもに即した授業実践を展開できるという主張を展開した。

このような実践的研究において抽出児を活用してきたのは，民間教育研究団体「社会科の初志をつらぬく会　別称：個を育てる教師のつどい」である。この民間教育研究団体では，抽出児を基軸にした授業研究を展開している[17]。ここで実施される授業研究は，実践者により選定された抽出児についての子ども理解とその子どもへの願い－実践の構想・実施－授業記録の作成－授業記録と周辺資料の共同検討という一連の過程を経る。

また，教育現場において，個に焦点をあてることをより先鋭的に実践的研究として深めてきたのが，静岡市立安東小学校である。安東小学校は上田の指導の下，40年に亘って「一人ひとりを生かす授業研究」というテーマで実践研究を行ってきた[18]。その研究を通して，カルテや座席表の研究を深めるとともに，「位置づける子」[19] という一人の子どもに焦点をあてた授業研究を行っている。

３．特別支援教育における対象児

抽出児と同様，従来の障害児教育，現在の特別支援教育や療育においても，個としての子どもに焦点をあてた実践的研究が行われている。そこで焦点を当てられる子どもは一般に対象児（Target Child）と呼称されている。

本節では，対象児についてその選定とプロフィールの記述について検討し，抽出児との比較考察を行うための枠組みを構成する。

⑴対象児の選定

対象児となる子どもたちは何らかの問題や症状を抱えている（とされる）子どもたちである。対象児は次のように選定される。

まず，最初の段階では，「観察」が行われる。そこで問題ある特殊な言動が観察されることになる。この第一次の観察の主体は主に親や教師である。したがって，問題ある特殊な言動とは親や教師の立場から見て問題ある特殊な言動といって差し支えないであろう。親や教師にとって問題のない言

動は，特殊であっても取り立てて観察され問題視にされることはなかろう。むしろそれはユニークな個性として認められるかもしれない。

第一次の観察により特殊な言動が発見されると，次に「チェックリスト」に基づく第二次の観察が行われる。チェックリストによって，特殊な言動が，数量的にチェックされ，「検査」（＝アセスメント）が必要なものであるかどうかの判断が行われる。この意味で「チェックリスト」は，「検査」の言わば簡易版といえよう。チェックリストによるチェックはしばしば「スクリーニング」と呼ばれる。チェックリストによって，検査が必要だと判断された場合に，本格的な検査（アセスメント）が実施される。この検査は，その子どもの症状が病理的なものであるか否かを測る尺度によって構成されている。検査によって，その子どもに病理的症状が認められた場合，障害児教育，特別支援教育，療育の対象とされる。それが対象児である。

検査には保護者の同意が必要なことから，学校現場の実践においては，チェックリストの段階で，対象児と考える場合もあるが，特別支援教育の実践事例報告や実践的研究における対象児のプロフィールを参照すると，多くの場合，複数の検査のスコアが掲載されている。

以上，対象児の選定についてまとめると，観察－チェックリストにスクリーニング－検査によるアセスメントという一連の手続きによって選定されていることがわかる。観察の段階では，教師や親の判断が大きく影響する。しかし，チェックリスト以降の段階では，医学的な基準を設けることによって，誰が行っても同じように選定できるシステムが構築されている。したがって，対象児の選定の基準は，教師や教室の外部におかれたものであり，選定の主体については，医療的な専門家，さらに言えば，作成された尺度そのものが選定の主体であるといえよう。

⑵対象児のプロフィール

対象児に関しては，そのプロフィールの書き方，様式がほぼ定式化されている。例えば，ある事例報告では下記のようなプロフィールが掲載されている[20]。

●子どもの実態（A児－小学３年男子）

○初回来談（小２時）での前担任の主訴の概要

・一斉指導での学習についていくことが難しい。普通の教え方では学力が身に付かない。

・漢字を書くことが難しいとともに，平仮名，数字にも鏡文字や不正確な字がある。また，マスに納めて書くことができない。

・体を動かすことは好きだが，ルールのある遊びができない。

・不器用で細かい作業ができない。

○諸検査の結果（平成13年実施）

【WISC－Ⅲ】[21] FIQ71　VIQ85　PIQ61
VC88　PO59　FD76　PS78

【K－ABC】[22] 継次処理86±８　同時処理81±７
認知処理過程81±１　習得度81±５

【S－M社会能力検査】[23] SQ85（担任記入）

このように，対象児のプロフィールとして，教師（保護者）による観察，とくに，その子どもの問題行動や問題状況について説明（しばしばエピソードを含む），といくつかの検査による数値結果（スコア）が記述される。問題行動や問題状況においては，対象児そのものの能力等についての記述が中心となり，例えば，クラスメートとのトラブルがエピソードとしてとりあげられるにしても，具体的に誰とトラブルになったかではなく，ほとんどの場合，対象児以外は個人を特定することなく他の子どもという記述の仕方をとる場合が多い。

したがって，対象児のプロフィールは，対象児の問題状況や特定化した症状を記述し，それを検査結果で裏づけたものといえよう。

４．対象児との比較からみる抽出児の特徴

⑴比較の視点１：選定の基準をめぐって

対象児の場合，これまで見たように，その選定は，観察とチェックリストによるスクリーニングと検査によるアセスメントというプロセスを経て選定されている。したがって，選定の基準には，対象児の所属するクラスやそのクラスで授業を行う実践者自身や，また研究しようとする研究者自身は関与しない。チェックリストや検査は独立して外部に立てられていることになる。

それに対して，抽出児の選定については，前述した近藤や梅津の概説の中にもあげられていたように，論者によって様々なことが検討されてきた。また，重松も例えば著書の中で富山市立堀川小学校の研究をとりあげ，そこで選定の基準，抽出の角度が明確になってきていることに触れている。その角度とは１．生活経験や学習経験の面から，例えば「⑴生活経験や学習経験とあまり結びつけないで，考えをおしすすめようとする傾向の子ども」等合わせて５項目，２．問題に対する見方･考え方・感じ方の傾向から，例えば「⑵事象を具体的に見たり考えたりしないで，概念的・抽象的に見たり考えたりしようとする傾向の子ども」等合わせて５項目である[24]。ここで示されている選定の基準は，固定化されたものではなく，機械的に当てはめることができない。子どもについての理解を日々深めることを通じてはじめて成立する基準であろう。

抽出児の選定の基準がそのようなものまで含み込んでいるとすれば，授業研究の対象となる授業を展開しているクラスの子どもたちの中から選定することの意味は，以下の点にある。すなわち，抽出児を選定する主体は授業を行う教師や授業を研究する研究者であり，その選定の基準は，抽出児の所属するクラスやそのクラスで授業を行う実践者自身や，また研究しようとする研究者自身には帰属しているということである。

このことについては，例えば，学校現場で行われている実践的な研究において，抽出児に関して次のような記述が見られることからも分かる。

「抽出児童生徒の選び方は，毎回とても悩み二転三転してきたが，まだ決まっていない。どの子も

大切であり，学級のすべての子を伸ばしてあげたい。私たちは抽出児童生徒を『授業を照らす３本の松明』と呼んでいるが，偶然ではなく，『この授業のこの場面でこの子にこういうような力をつけてほしい』という思いを強くした子を挙げている」[25]

「私の最初の二年間は，学級の中で問題を起こしやすかったりするような目立つ子が抽出児だった。その子がなんとかなれば学級が落ちつくといった“問題児”的な見方が多かった。（中略）私は一番気になる子や目立つ子は抽出しないことにしてみようと考えた。そういう子達は，抽出しなくても目に入ってくることが多いから，他の子を見ていても見ることができるのではないかと考えたのである（中略）一番気になったのは“太田”である。（中略）私が抽出児として選んだのは，かきまわす太田ではなく，その太田達のターゲットになっていた子達のひとり“進藤”である。（中略）私は進藤から“福永”に目を移してみようと考えた。（中略）無表情の福永の中身が『無』でないことを今さらながら知った私が，福永の向こう側に見たのが“浦野”であった。」[26]

このような抽出の基準をめぐって，上田は「抽出の基準はどういうことでもよい。能力でも個性的な傾向でもよい。ともすればまず抽出の基準の検討で多大の時間とエネルギーを費消してしまう傾向があるのは賢明なことではない。対象となる子はたんに手がかりなのである。その子を見ることによって，他の子もよく見ようというのである。ひとりの子を見るにも，他の子を忘れて見ることはない。他の子との比較においてある子を見るのである。またある子について新しい発見があれば，自然それは他の子を見るときの手がかりにならずにはいないのである。集団のなかでとらえるという意味は，まさにここにあるといってよい」[27] と述べている。ここで抽出児は「その子を見ることによって，他の子もよく見」るための手がかりと考えられており，基準そのものが絶対的な問題ではないとしている。

次に，学術的な研究を行う研究者についてはどうであろうか。例えば，重松と共に授業分析を理論的に跡づけようとした日比は，著書の事例分析の中で，次のように述べ，4名の子どもをとりあげて検討している。

「すでにこれまでの考察で子どもたちの考え方に言及してきたが，ここであらためて数人の子どもを例として，子どもひとりひとりの考え方をこの授業記録から引き出してみよう。子どもひとりひとりの考え方が究明されなければ，授業計画における役割賦与や子どもの教材へのとりくみ方も十分究明することはできないのである」[28]

ここで検討される４名は，日比の行った授業事例の全体的な検討において，キーパーソン的な存在となっていた子どもたちである。

それに対して，例えば主に教育工学的な立場から授業研究に取り組んできた水越は，「学級全員の一挙一動を同時に追えないので，抽出児という標本をえらんで，授業の評価をしていくもの。抽出児の選び方がむずかしいのだが，複数の視点（たとえば知能，対人関係，教科の学力，認知スタイルなど）で，１学級４～５名を選ぶといういき方が，主になっている」[29] と述べている。

これらのことから，研究者によって選定される抽出児は，研究者の有している研究観や研究の視座と密接に関連していることを示している。つまり，実践者と同じように，抽出児の選定の基準が

研究者自身に帰属しているということである。日比においては，「集団思考にしても，われわれは，個人的志向と別個にそれを論じようとするのではなく，個人思考のあり方を究明するなかで，その思考を成立せしめる他の子どもとの関連をとらえるのである」[30] という研究の視座のもと４名が選定されている。水越においては，客観的実証的な研究の視座から抽出児が選定される。

⑵比較の視点２：プロフィール記述のあり方

対象児についてのプロフィールは，先に検討したように，対象児の問題状況や特定化した症状の記述と各種検査のスコアによって構成されており，基本的に定式化されている。

それに対して，抽出児のプロフィールについては，十分に定式化されているとは言い難い。それは，⑴で見たように，選定の基準が外部に一律に設定されておらず，抽出児の所属する集団の具体的なあり方や実践者である教師の意図や願い，研究者の関心や研究の視座によって，基準が決まってくる側面があるからである。ここでは，教師の意図や願いが前面に出ている記述をとりあげてみる。

「理科学習におけるＳ男の姿　単元『雨水のゆくえ』からＳ男の生き方の一断面を示す。教科が異なってもＳ男が出ており，わたしのつかみどころが明瞭だから。（中略）Ｓ男の問題点。Ｓ男はいろんなことを知っている，他の子の知らない用語を適切に使う。そのたびに『さすが……』とむやみに感心する子（飯吉，山崎）や，それにからませて分からないようなことをさかんに言ってくる子（宮沢，小口）もある。読書家のＳ男は事典や図鑑等から得た既有の知識が相当あり，その知識量でいろいろと決め出してくる。その中で見通しを立て，限られた範囲で安全に動いているように見える。だから，彼自身の追究しようとする問題がなかなか具体化してこないし，仮りに問題をもったとしても頭の中で操作できる知識の結論から得られた見通しの範囲にとどまっていることが多い。（中略）そこで彼がよしとしている世界を教師の問いかけや他の子の追究でぐらつかせ，自分のあいまいさに気づき自分の問題をつくるような学習を設定したいと考えた。」[31]

「（前略）浦野に本当に強くなってほしかった。太田と仲良しであっても自分を失わない，太田と全て同じなのではなく，ちがう所ももっていける子になってほしかった。算数が好きな浦野はいつも○×がはっきりしている。そのことが太田に対する「全部，○」につながっている。他の子との関わりではちがう面も見せる浦野だから，この子がいろんな人間，いろんな立場，いろいろな考え方を知り，その中で自分の関わり方や考え方を広げていくことができたら，太田の様に大好きな相手に対しても，ちがう見方や対応ができる様になるのではないかと考えた」[32]

以上，実践者による抽出児のプロフィール記述の例をみた。対象児と比較すると，子どもを特定の側面からだけではなく，多様な側面からその全体性をとらえようとしていること。特に，他の子どもとのかかわりを非常に具体的にとらえていることがあげられる。前者は，子どもをより総合的にとらえようしていること，そしてその総合性を一歩すすめること＝その子どもへの願いの表れとして，後者は，その子どもと関わりのある周りの他の子どもを指導や評価の具体的な手がかりとしていることの表れとしてとらえることができよう。

抽出児のプロフィールは実践者としての教師が指導の事前に記述するものであり，研究者は事前にはこのようなプロフィールを記述することはほとんどない。実際に指導にあたることがない研究者は，指導にあたる教師のように「願い」をもつことができない。この部分については実践者に依存しているといえよう。

研究に際して抽出児のどのような記述に頼るかは，研究者がどのような研究観や研究の視座をもつのかによって大きく異なる。そのクラスやそのクラスの一人ひとりの具体性を離れて，客観的に追究しようとすればするほど，そのクラスや子ども，実践者から離れたところにある基準による記述に頼ることになる。それに基づく研究で焦点を当てられる子どもは，抽出児というよりも，むしろ対象児と呼ぶ方が適切であるかもしれない。

５．まとめと今後の課題

特別支援教育や療育の分野における対象児は何らかの問題や病理を抱えていると判断された子どもである。その問題や病理は，その対象児やその対象児が所属する集団の外に設定された基準によって特定される。逆に言えば，その基準によって問題や病理が特定された子どもが対象児である。そして，対象児に対して，その子の抱える問題状況の解消や病理的症状の軽減を目標とした教育が行われる。その意味で対象児はTarget（目標，標的）とされる子どもである。

それに対して，抽出児は必ずしも何らかの問題を抱えた子どもとは限らない。その選定についての確固たる基準が所与のものとして存在しているわけではない。しかし，クラス集団の中から，実践者たる教師がある意図や願いをもって，研究にあたる研究者が自己の有する研究の視座から主体的に選定することは共通している。いわば，選定の基準が実践者や研究者の側にある。そして，抽出児は授業研究，とくに現場で行われる実践的研究においては重要な手がかりとされており，学術的研究では重要な鍵となっている。その意味で抽出児について，Clue（手がかりや鍵）という言葉を使用しClue Childと表すことができる。

選定の基準の比較から，医学に基づく外部的な基準によって選定される対象児（Target Child）が絶対性と客観性の原理を有しているのに対して，実践者たる教師や研究者に帰属する選定の基準によって，実践者や研究者が選定する抽出児（Clue Child）は相対性と主体性の原理を有している。

また，プロフィールの記述の比較から，教師や他の子どもとの具体的かかわりを捨象して，問題状況や病理的症状が特定され記述される対象児（Target Child）が，抽象性，独立性と部分（一面）性の原理を有しているのに対して，教師や他の子どもとの具体的かかわりを中核にして，総合的な把握に基づく子どもの全体像までを記述しようとする抽出児（Clue Child）は，具体性，関連性，全体性の原理を有している。

以上の抽出児と対象児の原理について一覧にしたものが表１である。

今後の課題について，実践レベルの問題と研究・理論レベルの問題に分けて示す。

前者は，具体的には教育実践の計画，指導と評価の問題である。本稿では，抽出児と対象児につ

表１　抽出児と対象児の原理

	抽出児（Clue Child）	対象児（Target Child）
選定基準１	相対性	絶対性
選定基準２	主体性	客観性
記述１	具体性	抽象性
記述２	関連性	独立性
記述３	全体性	部分（一面）性

いて選定基準とプロフィール記述の比較を通して考察したが，そこから次にどのような計画が立てられ，どのように実際に指導し，それをどう評価しているかという問題である。これもまた，抽出児と対象児の計画・指導・評価と比較することにより，抽出児のもつ機能をより明瞭にとらえることができるものと考えられる。また，例えば河合が「本当に全身全霊をあげてのかかわりというのは，一人に向けてなされていても学級全体に作用する。しかし，このようなときにほんの少しの心のおごりがあったり，気が散っていたりすると，何か危険なことが生じたりする。一人に向かうことがクラス全体に向かうことになる不思議さを，教師はよく知っていなくてはならない」[33] と述べていることも，抽出児の実践レベルの問題として追究する必要があると考える。

また，後者については，現在すでに研究を進めつつあるものも含めて，抽出児の視点から，教師の専門性，教育における目的と手段の関連，とくに質的研究にかかわって教育実践についての科学的追究のあり方の問題を追究していくことが課題である。

付記

本稿は，日本教育学会第61回会大会自由研究発表（2002）において口頭発表した「教育の実践と研究における抽出児－対象児との比較考察－」の一部について大幅な加筆修正を施し再構成したものである。

註

（１）　本研究では，抽出児を「授業研究において実践者や研究者によって選定された１名ないし数名の子ども」とする。

（２）　秋田喜代美，キャサリン・ルイス編著『授業の研究 教師の学習』明石書店　2008

（３）　佐藤学「日本の授業研究の歴史的重層性について」，秋田喜代美，キャサリン・ルイス編著『授業の研究 教師の学習』明石書店　2008

（４）　同上

（５）　拙稿「授業の縦断的研究に関する一視点－個人別発言表を使用する子どもの追究－」『教育方法学研究』第16巻，日本教育方法学会　1991　pp.107-116

（６） 拙稿「授業研究における抽出児に関する試論的研究－授業記録処理を介した抽出児選定による事例検討－」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）』第37集　1992　pp.37-52，拙稿「授業記録処理を介した抽出児選定に基づく授業研究－同単元授業の比較による関係性追究の試み－」『教育方法学研究』第18巻　日本教育方法学会　1993　pp.45-56

（７） 筆者による「授業記録処理を介した授業研究の試み」は，抽出児を選定するにあたって，その選定の基準や方法を明確にしようとしたものである。この点については一定の成果をあげているが，抽出児をなぜ用いるかについてまでは，現時点で振りかえると十分に説明ができているとは言い難い。

（８） 対象児は障害児教育，特別支援教育，療育の分野で用いられてきたものであり，その分野で抽出児という呼称は使用されることはない。しかし，授業研究においては実際には，本研究でいう抽出児の意味合いで対象児をという呼称を用いている場合も，逆に本研究でいう対象児の意味合いで抽出児という呼称を用いている場合もある。このことは，授業研究においては抽出児があいまいなままに使用されていることを示唆するものである。

（９） 朝日新聞1993.5.29 付け朝刊

（10） 近藤久「抽出児」吉本均責任編集『授業研究大事典』明治図書　1987

（11） www.hak.hokkyodai.ac.jp/archives/kyoumu/kyouikujissyu/part3_1_1_2d.pdf.html
最終アクセス日2009年１月18日

（12） 重松鷹泰著『授業分析の方法』明治図書

（13） 富山市立堀川小学校『授業の研究』明治図書　1959

（14） 重松鷹泰著『教育方法論Ⅱ教育科学』明治図書　1975　p.114

（15） 上田薫著作集４『絶対からの自由』黎明書房　1994　p.199

（16） 同上　p.232

（17） 社会科の初志をつらぬく会著『問題解決学習の展開』明治図書　1970

（18） 上田薫・静岡市立安東小学校著『個の育つ学校』明治図書　1982

（19） かつて，安東小学校で研究主任を務めた築地久子は，「位置づける子」について，抽出児と比較して次のように述べている。「抽出児の場合，能力別，考え方別，意見別といった何らかの基準で分けたグループの中から，一人ずつ代表事例を選ぶ。（中略）抽出児は，集団を変容させるための道具であったり，集団を理解するものさしになったりする。この場合，抽出児は集団を変容させるための道具になってしまう。位置づけた子がいる授業は，この逆で，集団が位置づける子を変容させるための手段になる場合が多い。位置づけた子の場合，その子自身の一貫した物の見方の特長をとらえ，その子の物の見方の変容をめざして，授業の目標も，授業展開の組み立て方も，微妙に違ってくる。授業展開は，位置づけた子がどんな事実に動きやすいか，どこにつまずきやすいか，誰を動かせばその子が動くかといった日頃の行動観察からくるその子の特長をとらえて，組み立てる。」（落合幸子･築地久子「築地久子の学級づくりと授業」『授業研究』372号　明治図書　1991　p.138）ここでは，「位置づける子」の説明を行うために，

「抽出児」との差異を述べていると考えることができる。選定した個に焦点を当てるという角度から見れば,「位置づける子」もまた抽出児ととらえることができる。また，筆者の視座から言えば,「能力別，考え方別，意見別といった何らかの基準」に教師の主体性が全く反映されていないとすれば，それによって選定された子どもは抽出児というよりも対象児に近いものである。

(20)　佐藤淳「通常の学級において学習上困難を示す児童生徒への指導の在り方に関する研究－指導の方法と教育的配慮についての検討－」岩手県立総合教育センター研究紀要　2002　p.259

(21)　Wechsler Intelligence Scale for Children-Third Editionの略称。児童生徒の包括的な一般知能を，言語性，動作性，全検査の３種類のIQによって測定する知能検査である。６つの言語性下位検査と７つの動作性下位検査で構成されている。

(22)　Kaufman Assessment Battery for Childrenの略称。子どもの知的活動を認知処理過程と知識・技能の習得度から総合的に評価し，教育・指導に直結しようとする心理・教育アセスメントバッテリー。

(23)　Social Maturity Scale。社会生活能力の測定領域（１.身辺自立　２.移動　３.作業　４.意志交換　５.集団参加　６.自己統制）別に社会生活年齢（SA)と社会生活指数（SQ)を算出する検査。

(24)　前掲書（14）　pp.114-115

(25)　平成 16 年度 東海市教育実践総合発表会パネルディスカッション記録H16/11/18 富木島中学校区- 要約 3 - http://www.medias.ne.jp/~fukisimt/paneruyouyaku.pdf,　最終アクセス日　2009年１月13日

(26)　第32回全国研究大会提案　実践記録　小五　公害と私たちの生活－問題をかかえ続ける子に－　東京・千歳小学校　畑悦子，社会科の初志をつらぬく会,『考える子ども』第32回夏季集会特集号　1989　pp.41-42

(27)　上田薫著作集５『個を育てる力』黎明書房　1992　pp.82-83

(28)　重松鷹泰監修／日比裕著『授業分析の科学１　授業分析の基礎理論』明治図書　1967　p.178

(29)　水越敏行著『授業改造と学校研究の方法』明治図書　1985　p.107

(30)　前掲書（28）　p.121

(31)　第17回大会提案　実践記録　初歩的社会科論－低学年での実践から－　初志の会岡谷グループ，社会科の初志をつらぬく会,『考える子ども』96号　1974　pp.17-18

(32)　前掲書（26）　p.43

(33)　河合隼雄著『臨床教育学入門』岩波書店　1995　pp.203-204

Fundamental Consideration on Clue Child in Lesson Study：Comparison with Target Child

Satoru TANOUE

The purpose of this paper is to consider the principle of a child who is selected in Japanese lesson study. The child is called "TYŪSHUTUJI" in Japan. This word means extracted child when translating literally into English. But, we call him or her "clue child" in this paper.

The clue child was often used also in scientific lesson study also in practical lesson study in Japan. Clue child is one important feature of lesson study in Japan, and it is experientially recognized to be effective in the study. However, it has not been explained the reason to use clue child for enough. It is because the methodical basing is not enough.

So, this research considers clue child's principle through comparison with target child selected in special support education. The viewpoints of the comparison are a standard of selection, and the state of description of a profile. The next became clear as a result of the comparison.

From comparison of the standard of selection, clue child has a principle of relativity and autonomy to target child having a principle of absoluteness and objectivity. From comparison of description of a profile, clue child has a principle of concreteness, relevance, and totality to target child having a principle of abstractness, independency, and portion nature.

As the future subject around clue child, there are a problem of a practice level and problems of a scientific level. The former is a problem of the plan, instruction, and evaluation. The latter are a problem of teacher profession, a problem of relation between means and purpose in the educational practice, and a problem of scientific investigation of the educational practice relevant to qualitative research.